

小説

① 林美美子の

「めし」と「ヤンヤン・シンヤン」町

② 武田麟太郎の

「金子崎」と「芋がわ

③

川口松太郎の
「飯と汁」と「駕籠屋」

めしと小説

たしかに「めし」と「小説」は、少し出でてゐる。やほんと下品と叱られるなら「食事」と「飲食」、と訂正してもかまわない。どちらにしても、小説は生きた人間のあれこれ描くのだから、生きるに一層大切な「めし」と「駕籠屋」には、それなりのが当り前なのだ。

もともと、小説のなかには、主として人間が何を食べたりするのか、どう稼げたりするのか、まるでわからぬじやうのやうだ。そんなのはオモシロイナカで、トテモアリハ関係ない小説「めし」となる。

まあ、小説はトコロアリハメシによく、やたらに食べたり飲んだりはれむせいけれど、食いつぶつには大金で、人間の過去現在のポイントを、食つやうのかむじあらわすところである。

—能書きは終つてしまふ、こういふ小説のなかから、どうかで金子崎とよびのしとつながつてゐるものを持つてゐた。むろんもついた／＼おのづかげられど、まあ、これは「めし」と「ヤンヤン・シンヤン」町

女の小説家で有名だった林美美子はもう死んでけれど、死ぬまで書いていた小説のなかに、朝日新聞に連載した「めし」というのがある。丁度、新世界で、シャンシャン町を見物した林美美子が、「めし」と大きく書いてある看板に力強くして題がきまつた、という伝説のある小説だ。

この小説は昭和二十六年四月から朝日新聞に出はじめて、六月二十八日に林美美子が死んだため、途中で終りになつたが、そのまんなかさうに、新世界のことが書いてある。東京から大阪の親戚へ、家出してきた里子という娘が、親戚の知り合いのセガレで芳之即という男と新世界へくるのだ。

小説を少しおもうつしてある。

二人は駅町で電車を降りた。
音楽の、新世界とは、ふんいきが、まるきり違う。線路下のトンネルをくぐると、共同便所に、交番の派出所が、左側にあつた。
「ここね、シャンシャン横丁というのですワ。昔は、この向うに、通天閣いう、高い鉄骨の、塔があつたのですよ……」

芳太郎の説明である。里子は、がっかりしていだ。
ごみごみとした狭い道筋を、両側とも同じような店並が続いている。すし、うどん、串カツ、マージャン、将棋クラブ、カイテン焼き（たこやき）、ホルモン焼き、一杯五円の黒窓、姓名判断に、英語。丁度、東京の辺境にそっくりである。

小説はこんな真合で、里子は芳太郎にさせられて、テント張りのストリックに入りかけ

④

(1) 林美美子の

「めし」と「ヤンヤン・シンヤン」町

るが、郵局入らないで千日前へ行く。題は「めし」だけれど、めし屋へ入つたりする場面はない。

それでもこの小説には、いま読んで面白い人が（新世界のことだけでも）いくつかある。

ます、当時（昭和二十六年）は通天閣がなかつた、ということ。

通天閣は明治四十五年に開業したのだが、戦争中の昭和十一年、スクランプとして壇に貯納することになり解体された。戦争に負けたから、再建されたのは昭和三十一年。それでこの小説では、昔は通天閣があつた——と書くしかなかつたわけだ。

一番目には、テント張りのストリップ小屋があつたこと。これは通天閣下の西側、いまモーター・ホールになつてゐるあたりに、京設これがいたと思う。私の記憶に残つてゐるやうらい前まではあつたはずだ。もつともテ

ント張りよりはマシな、仮設のコヤになつていた。
三番め、林英美子がシャンシャン町を歩いこ、ほんとに「めし」の看板にカシケキしたとすれば、それはどこでつたかと考えて見るのも面白くないだらうか。
昭和二十年代、シャンシャン町にどんなめしがあつたか、土地の人々に聞いてみると、突き当りの「あぶ屋」はもちろんあつた、あれは古い店ですよ、という。しかし、他の店についてこは、三軒ぐらいあつたかも——の程度で、店名まではおぼえていない。
交番の近くに、天保山駅門でのしを食わせる「京屋」があるが、いつぞろの商店か、百貨にたずねればわかるだけだ、そこまで私は私も調べなかつた。

さて、林英美子の「めし」についていろいろ書いてきたが、その伝説ではなくて実説（）

を少し出しておくことにしよう。

石浜恒夫という小説家が住吉の方にいる。ヨットに乗つたりヒマラヤに登つたり、そんなことの方で有名だ・また「こいさん こいさん 女であることは……」ヒーフランク永井がつたった流行歌「こいさんのラストコール」なんかの作詞でも知られている。

そんな石浜恒夫が、林英美子をジャンジャーン町に案内したり、小説のなかの大坂井を教わたりしたのをさうに・石浜本人がそう書いている。

「めし」は新潟文庫などにあるのでサラで一百円以下で買えるはず。

(2) 丸田雄太郎の 「金ヶ崎」と「モモサガウ

丸田レン太郎という小説家は日本橋東一丁目の生れで、今宮中學（いまの今宮高校）を卒業した。戦後すぐに死んだが、生きていれば七十一歳になる。はなやかに活躍した小説家だつた。

「金ヶ崎」は、そのはなやかさが、まさにかけの頃、昭和八年の小説で、ひヒリの小説家がある夜金ヶ崎へやつてきて、一夜すごす体験を書いてある。

この小説のことは、金の歴史を語る場合、よく引き合に出されるから、知っている人も多いと思う。
そこらにコロカッテルような、底の浅い氷ケ崎小説と味がちがうのは、作者自身が子供のときからこの町を知つていて、しかも公式

的でない深みのある左翼思想、ヒリュよりは人間の持ち味で、下積みの生活者に寄り添う

卷之三

「幽ケ館」のなかには界隈やら飲んだくれやらが登場して、外采者にすぎない小説家、作者と、かりどめのかかわりを持つ。それは文部省に届かれていて、決して同情的ではない。突き放している。ヒミツともできる。

だがその突き放し方は、ワイベツヒはらがつて、むしろ悲しさとかさびしさとかに根のある突き放し。

理クリはやめとマラ。

小説はこんなふうに進むのだ。

——毎日書くが、こぎた小説家は、一軒の家の前で、そこが自分の生れに家で、壁に残

つてゐる落書きも自分のしたものである」と
と確認する。その家はいま、夜の女たちの力
せや様なのだ。小説家はそこで一人の女の客
になつて部屋にあがる。女は、夫は女殺した
男婦で、小説家は五十銭払つて何もせず、二

「いこる、餅入小豆がユーフニョレ」と、壁に張

オカユをいつもあつかひやう。

ほかの店も頼んでしてくれはじことはないが、かじやなし、腰かけにすわってオカユヒいえはすぐ出してくれる。大きな釜に作つてあるのは読者の方が知つてるよです。

なり。ましてアヤキガユモウカイ。白い普通の
カユだけせ。このへんは、音の方がいろいろ
あつたヒいうことになる。

シャビトセ、ハコハシのヒメがアタバ「

金では二町あつたレザメシ圓が古シテして
もう五、六日か、もつとなむか。

もう少し、小説呪うつしておこう。朝にみて、小説家が一人で眺めた露店の光景だ。

人町五歩

此處、という名のどしょりが行なはれ
て運はれるのに出でつたあと、二人はショーキュー屋に入る。せこどロ二日ものしあ食つ
こなしヒコウ、ボタンの一つもなし外あにナ
ワをわづけた男ヒ皓をする。

外宮の男は、西オゴレビはいえてもめし一杯頬むとはいえなし、とリうが、小畠家に向ては「あんたは、旦那やよ、こに、かめへん」と、めしきオゴレと頬む。そして野宿して

三人、せまい道へ入つて行く。

卷之三

「おれすむかは山林地帯だぞ。」「アガコ人れ、おつとん」と、テモロコシが云つた。アガコ人れ、人々の手筋で離へねつて、アガコ人れの手筋でハシビ、アガコ人れのよひはカユミの手筋で画しながり——「なごやし、明日は十五日ニシヤ、アベキガイニ鉢モチヘアベキガイニ鉢モチヘアベキ、アベキガイニ鉢モチヘアベキがアベキガイニ鉢モチヘアベキ」、おへなじ、今晩元旦那がつ

魚の骨や頭、野菜の切れ身など一しょに盛り込んじのやら——それは確かに立派、灰^{ホコ}よりのものも鍋の裏面に浮べてじたし、また、すし屋のゴミ箱から、集めたらしこ、赤いショウガの色がとれつくりまつた種々種多の形のくずれたすしやら——すべて、異臭互放ち、しかしその臭いが唐突したうに不思議である食べ物——一錢二銭でちつこいるのである。

「この西湖は、もうほんとほんと全く見られない。もうこういふ極めて、余り西湖が見えない。」
これが湖歩と略傳である。たゞこの句は、

「金ヶ崎」は古本屋でも新本屋でもちよつとみつけにくり。どうしても読みたひ人は、集会に人かきでも下さい。